

研究課題	在外教育施設における映像制作を通じた表現力の育成
副題	～日本文化および異文化の発信によるグローバル人材の育成を目指して～
キーワード	在外教育施設、映像制作、日本文化と居住国の文化の発信
学校/団体名	私立ロッテルダム日本人学校
所在地	〒3055WJ Verhulstlaan 19, Rotterdam, The Netherlands
ホームページ	<a href="https://www.jsrotte.nl/">https://www.jsrotte.nl/</a>

## 1. 研究の背景

ロッテルダム日本人学校は、小学部・中学部の児童生徒合わせて20名前後の小規模校である。各学級の在籍児童生徒は1～5名と少なく、多様な人間関係の構築や、協働的な学習を促すことに課題がある。これらの教育課題の解決に向けて、本校ではオランダで発展したイェナプラン教育の内容を参考に、異学年集団での学び合いの導入をすすめている。また、本校はインターナショナルスクールと校舎を共有しており、普段から盛んに交流が行われている。さらに、オランダの公立校や老人ホームとの交流など、多くの異文化交流の機会を設けている。

このような日常的な学習や交流行事の中で、異学年の児童生徒や交流先の方々など、伝える相手を意識し、学習したことを表現する活動を取り入れることで、小規模日本人学校の課題を解決することができる考えた。特に交流行事においては、異学年集団での話し合いや調べ学習等、協働的な学習を効果的に進める機会であり、ここにICT機器の活用や映像制作が加わることで、非常に有益な学びになることが想像される。そして、国籍や人種・民族など、多様な人々とかかわる社会の中で、児童生徒たち自身が自分で考えて行動し、協力・協働し合うことのできるグローバル人材を育成していくことにも繋がると考えている。

小規模日本人学校の特色を生かした教育活動をすすめることで、児童生徒が主体的に学び、発信する機会としていくために、今年度の研究課題として取り組んだ。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本人学校という特殊な環境の中で、居住国や日本の文化を発信する活動を通して、表現力を育成することである。そのために、まずは相手を意識して学習したことを伝える実践を積み重ねることが必要であると考えている。その際の表現手段として、プレゼンテーション制作や映像制作に関するICT機器の活用方法について研究し、有効な指導法やカリキュラム開発へと繋げていく。本研究を実施することで、以下のような学習効果が想定される。

- 1 居住国や日本の文化について、調べたことや考えたことを伝えようとする意欲が高まる。
- 2 映像制作を通して、受け手の立場を考えた表現力を育成することができる。
- 3 異学年集団での協働的な学習をすすめることで、自分たちで考え、行動し、協力・協働し合う力を高めることができる。

日本人学校の特色を生かし、児童生徒の協働的な学習を促す実践を積極的に行うことで、国際理解体験が豊富で、コミュニケーション能力の高いグローバル人材を育成していきたい。

### 3. 研究の経過

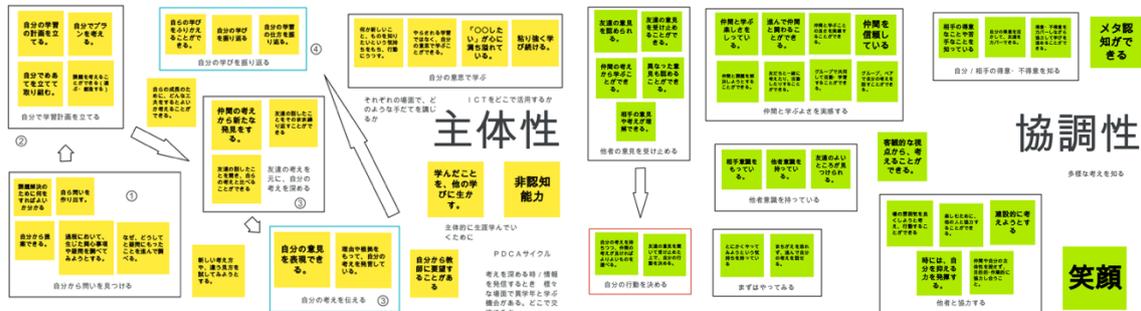
#### (1) 取組内容・方法

時期	取り組み内容・方法、実践の評価
4月	職員会議で今年度の研究の共通理解を図る。 1 研究テーマ、研究組織、研究方法 2 研究計画
5月	職員研修① 1 ICT 機器・撮影機器の使い方について 2 映像編集技法について 3 児童生徒に育てたい力についての共有
6月   2月	自分たちの学んだことを、映像やプレゼンテーションにまとめて発表する。 居住国の文化や日本の文化を紹介するプレゼンテーションや映像を制作する。 <b>【実践する学習・行事等】</b> ・日々の教科学習                      ・総合的な学習の時間 ・修学旅行（課題研究）              ・遠足、社会見学 ・和太鼓演奏                              ・文化祭（ステージ発表） ・インターナショナルスクール交流（日本文化紹介） ・現地校交流
8月	職員研修② 1 ICT 機器の有効な活用について 2 児童生徒の表現力の育成についての共有 3 現地理解（オランダ・ロッテルダム）について
9月	保護者公開（日曜参観、修学旅行の課題研究発表）
10月   12月	職員研修③ 1 異学年による協働的な学びの実践について（実践報告） 職員研修日（毎週月曜日）に、各教員が実践報告を行う。 2 実践の評価について 実践報告をもとに、児童生徒に育てたい力の視点から評価する。
1月	研究成果の確認と評価
2・3月	研究報告書の作成 次年度の研究計画立案

#### (2) 育てたい力の共有

最初の職員研修の中で、本研究を通して児童生徒にどのような力を育てていきたいのか、共通理解を図った。本校が考え方を取り入れている「イエナプラン」の中には、自分自身との関係、他者との関係、世界との関係の3つの関係性が示されている。自分自身が挑戦することや責任をもつこと、異年齢集団の中での協働することで、自分と他者との相互作用の中で周囲の世界と繋

がりが生まれてくるというものである。このような関係性を参考に、本校では「主体性」と「協調性」という2つの視点から、どのような児童生徒を育てていきたいのか、カード整理法を用いて共有した。また、カード整理を行う際には、ICTを使った考えを整理する手段を紹介することも兼ねて、Google Jamboard を用いて行った。



児童生徒に育てたい力を共有したカード整理 (Google Jamboard を使用)

この研修を通して、今年度は特に「友達の考えをもとに自分の考えを深めること」「相手意識をもって自分の考えを伝えること」を中心に据え、仲間と協働的に学び合える児童生徒を育てていくことを教員間で共有した。このような力を育てていくための授業実践として、異学年集団での学びや、他の小規模日本人学校との遠隔合同授業による学び、そして本研究である、伝える相手を意識したプレゼンテーションや映像制作による発信を行った。

#### 4. 代表的な実践

##### 実践① 中学部合同技術における異学年交流

###### 【実践概要】

本実践では、約7歳の年齢差である、中学部と小学部1・2年生との異学年交流を試みた。技術で学習したことを低学年「生活科」の野菜の栽培に照らし合わせ、栽培のアドバイスについてプレゼンテーションを行った。

###### 【学習過程】

##### ①授業や調べ学習で知識・理解を深める

「ナスの生物育成技術」「オクラの生物育成技術」について、技術の授業の中で調べ学習を行った。資料やインターネットを使って栽培方法や成長段階に合わせた工夫についての知識を深めた。

##### ②ICTを活用したプレゼン作成

タブレット端末に付属しているプレゼンテーション作成ソフト (Apple, iPad 付属の Keynote) を用いて、ナスとオクラの育て方についてのスライドを作成した。その際の条件として、スライドの枚数を5枚以内に制限し、



低学年向けに枚数の少ない視覚的効果の高いスライドを作成することを課題とした。また、小学部1・2年生の実態に合わせて、写真やイラストを活用したり、フォントの大きさやふりがな入れたり等の工夫ができた。

③実践（プレゼン発表会実施）

プレゼン発表の時には、スライドの説明に加えて、聞いている子たちの反応を見ながら発表を行ったり、随時手書きで図を付け加えながら補足説明を行ったりした。ICT活用することで、小学部1・2年生の子どもたちにもわかりやすい発表とすることができた。

④実践を振り返って

スライドの枚数を制限して情報量を少なくしたり、使う言葉を簡単にしたりすることで、低学年の子どもたちも理解できるようにした。その過程の中で、自分たちが理解した栽培方法をかみ砕いて説明するためにはどのような言葉を使えばよいか、どのような写真やイラストを見せると視覚的にわかりやすいか等、様々なことを考えることができた。このような相手を意識して発信する学習を通して、表現力の育成へと繋げていくことができると考える。

**実践②** 日本の友達に自分の「今」を伝えよう！

**【実践概要】**

本実践では、小学部3年生の児童が、オランダの特色や実際にオランダで生活する中で体験したことについてのプレゼンテーション作成と動画作成を行った。完成した動画は、本校に来る前に通っていた小学校や、インターナショナルスクールの友達に伝えた。



**【学習過程】**

①オランダの紹介したいことを考える

小学部3年生の社会科の授業の中で実践を行った。実際に体験した出来事やびっくりしたことなどを出し合い、その中で子どもたち自身がぜひ日本の友達に伝えたい、自慢したいオランダのものを考えた。また、オランダで生活する中で感じた日本との違いも1つの視点として、何を紹介するかを選択した。

②プレゼンテーション作成

iPadのKeynoteを使ってプレゼンテーションを作成した。現行の学習指導要領では、小学部3年生の国語でローマ字の学習を行う。それまではタブレット端末を使ってインターネット検索をするときには、ひらがな入力を使用していたが、ローマ字入力へと切り替えられるように、今回のプレゼンテーション作成では、ローマ字入力を使うようにした。また、メディアリテラシーの重要性についても触れながら学習をすすめた。インターネットで検索した画像を何でも取ってきてよいのではなく、どの写真やイラストを使ってよいのか等も考える機会となった。



③以前の学校の友達への動画作成

オンラインで使えるグラフィックデザインツールの「canva」を使って、動画の作成を行った。作成した動画は、自分の以前の在籍校（日本、アメリカ）の友達が見られるように、学校のレンタルサーバーにアップロードし、URLをQRコード化して見られるようにした。



④実践を振り返って

今回の実践では、一般的なオランダの紹介ではなく、子どもたち自身が実際に経験したこと、日本との違いを感じたことから、この感じたことを「相手に伝えたい」という思いを持って学習をすすめることができた。伝える相手がいることでのモチベーションの向上や、何をどのように紹介するか、表現方法を工夫することにも繋がったのではないかと思う。

**実践③** オランダ語での学校紹介 VTR の作成

**【実践概要】**

本実践では、小学部5年生の児童が、本校の学校紹介 VTR を作成した。本校では、現地の老人ホームに訪問し、交流する行事を実施している。その際に学校のことを知ってもらうために、授業の様子や行事などについて、オランダ語を使って発表した。

**【学習過程】**

①英語/英会話の授業で、オランダ語での学校紹介を作成

紹介したい学校の場所や学校行事などについて、まずは英語で台本を考えた。その後、考えた台本をオランダ語に翻訳した。本校では、英会話の授業をオランダ人講師が担当している。その講師の協力のもと、オランダ語の台詞の練習を行った。

②プレゼンテーション・動画作成

写真や動画を撮影し、プレゼンテーションを作成した。プレゼンテーションの作成には、タブレット型 PC (Microsoft Surface) と、Power Point を使用した。プレゼンテーションはクラウドで共有し、進捗状況をお互いが確認しながら、修正する箇所を確認したり、よい所をコメントしたりすることもできた。



③実践を振り返って

感染症予防のため、今年度は実際に老人ホーム訪問をすることはできなかったが、作成した VTR は老人ホームの方々にプレゼントし、大変喜んでいただいた。この経験から、子どもたちの達成感や自信につなげることができた。

## 5. 研究の成果

今年度の研究の成果について、育てたい力として共有した「友達の考えをもとに自分の考えを深めること」「相手意識をもって自分の考えを伝えること」の2つの視点で実践を評価した。本校の教員に取ったアンケートの自由記述の結果より、以下のような成果が見えてきた。

- ・相手意識が高まり、相手に伝えるための表現の仕方を工夫することができた。
- ・伝える相手がいることにより、学習意欲が向上した。
- ・相手に情報を発信するためには、再度学習内容を深め、学びを再構成していく必要がある。このような学習の機会に繋げることもできた。
- ・ICTを活用することで、発信の相手を地域や世界中へと広げることができた。

異学年の児童生徒や、違う学校の友達、お年寄りの方々など、伝える相手がいることで、目的意識をもつことができ、児童生徒のモチベーションの向上に繋げることができた。そして ICTを活用することで、その相手は校内や周囲の人だけではなく、世界中の人たちへ伝えられるということが児童生徒たちも実感できたのではないかと思う。

また、学んだことをより深く理解したり、相手に合わせて再度学び直したりすることにも繋がり、相手に合わせた表現の仕方を工夫することができた。そして、意欲を持って取り組んだり、仲間と協働したりする等の活動を通して、非認知能力の育成にも繋げられると考えている。

## 6. 今後の課題・展望

本研究を通して、相手意識をもつことが大切だと気付いた点が大きな成果であり、モチベーションの向上や表現力の育成にも繋がることを確認できた。一方、他者の考えを聞き、そこから自分の考えを深めることにはまだ課題がある。来年度は、相手が表現したことや考えたことを理解し、自分の考えと比較したり、新たな発見をしたりする力を育てていきたいと考えている。

そのような学びの機会として、他の小規模在外教育施設の児童生徒との遠隔合同授業を計画している。今年度、試験的にイタリアのローマ日本人学校、ルーマニアのブカレスト日本人学校との遠隔合同授業を行った。この2校と連携しながら、数回だけの交流授業だけではなく、日常的に学び合える環境づくりを行うことで、学び合いの機会が少ない等の在籍人数が少ないことによる在外教育施設の課題の解決へと繋げていきたい。

## 7. おわりに

今年度は、映像制作を通して表現力の育成を目指して取り組みを進めてきた。今後も相手意識をもって自分の考えを伝えること、相手の考えから自分の考えを深めることで、児童生徒の深い学びへと繋げていきたいと考えている。

最後に、研究をすすめるにあたり、このような機会をいただき、パナソニック教育財団の関係者の皆様に深くお礼申し上げます。

## 8. 参考文献

リヒテルズ直子(2019)今こそ日本の学校に！イェナプラン実践ガイドブック. 教育開発研究所.